

四大学連合発足記念講演会―「ミレニアムにおける科学と学問」―  
2001.4.20

## 国際関係論から国際社会学へ

東京外国語大学長・社会学博士 中山 嶺雄

### 1. 国際社会の変動を見すえて

私はこれまで、ディシプリン (discipline) というのでしょうか、自分の専門的学問領域としては国際関係論を勉強してきました。その対象地域は、主に中国、東アジアであります。国際関係論がどんな学問かについては、しばしば申し上げてきたつもりですし、そのためのテキストも書いているのですが (『国際関係論』、中公新書、1992年)、最近は、「国際関係論から国際社会学へ」というようなことを考えていて、そのことは今日の国際社会の変動の内面とかなり密接に関係しているというのが、現在の私自身の問題意識ですので、この点からお話してみたいと思います。

そもそも国際関係論そのものが非常に新しい学問分野であり、1930年代に一つの学問としての枠組みが出来上がってきたとってよいでしょう。イギリスの有名な現代史家にE・H・カーという人がいます。日本でも戦後にずいぶんこのE・H・カーが読まれた時期がありました。いずれも清水幾太郎さんの名訳なのですが、岩波新書の『歴史とは何か (What is History?)』や『新しい社会 (New Society)』を読まれた方は多いと思います。そのカーは、第一次世界大戦と第二次世界大戦という両大戦間に焦点を当てて『危機の二十年 (The Twenty Years' Crisis 1919-1939)』という著作を書きました。私も教壇に立っていたころは、ゼミのテキストに使ったものですが、結局20世紀は二度にわたって世界戦争の悲劇を繰り返してしまいました。その両大戦間、つまり戦争と戦争の間の時期が危機の20年であり、この現実を直視するリアリズムの立場から国家と国家の諸関係を学問研究の体系として掘り下げる必要を彼は説いたのです。結局、人類は歴史の教訓を学び得なかったのですから、カーの危機感は正しかったのです。

このような経緯を経て成立した国際関係論は、英語で言うと、インターナショナル・リレーションズ (International Relations) といいます。そもそも、インターナショナル・リレーションズとは、ネーションとネーションを結ぶということにおいてインターである。これが国際関係と訳されているのですが、本来はインターステイトといってもいいのかもしれませんが。ナショナルというのはどちらかというと、民族と民族、国家と国家というかたちになりますので、インターステイツ・リレーションズといってもいいのかもしれませんが。こういう学問がやがて第二次大戦後、まず米国でやがて

日本でも盛んになりましたし、私自身も大学院で専攻したのは国際関係論で、当時は非常に新鮮で魅力的な学問だと感じました。私は現代中国を研究しながら、もう少し大きな広がりの中で考えてみようということで、国際関係論という学問を勉強することにしました。しかし最近、私自身、どうも国際関係論という学問は今日の時代に追いつけないのではないか、もう少し古いのではないかという反省というか、自分の認識の変化を感じるのです。

というのは、皆さんご承知のとおり、ちょうど10年前の今ごろは、あのソ連邦が崩壊しつつあったのですね。20世紀は戦争の世紀でしたが、一方では革命の世紀でもあり、社会主義革命こそ進歩と発展の道標だと多くの知識人に信じられてきましたので、この点では先程のE・H・カーも予測を大きく間違えました。やがて人類は社会主義革命を経て、世界が社会主義の方向に進んでゆけば人類は幸せになると思われたのですが、実はそれは決定的な誤りであった。あるいは社会主義の理想は正しかったかもしれないが、現実としてのソ連や東欧諸国を見ると、結局行き詰まってしまっていたのです。そのことがまさに、1990年代の初頭からはっきりしてきて、あの盤石な、日本海の向こうにもものすごく巨大な存在としてあって、それが世界を動かしていたと思われていた社会主義大国のソ連あるいはソヴィエト帝国というものが、あっという間に崩壊してしまっただけです。

私自身はそのことをかなり以前から自分の著作などでは考えてきたつもりですが、その歴史的転換期から今年はずっと10年経つわけです。ベルリンの壁が崩壊し、その前に中国ではあの衝撃的な天安門事件がありました。天安門事件についても、最近の『フォーリン・アフェアーズ』誌に「真相」が発表されたりして、その真偽をめぐるいろいろな議論がありますけれども、少なくともあの当時は、趙紫陽さんが中国共産党のトップ、つまり総書記でしたから、彼が逆に小平さんを捕まえてしまったとしたら、中国の共産体制はソ連や東欧諸国に先駆けて、あっという間に崩壊して民主化していたかもしれません。

小平さんはあのときに自分が軟禁される危険があったと告白している。だから一挙に趙紫陽氏を軟禁してしまったのです。そして首都北京に戒厳令が敷かれ、次いで天安門の悲劇が起こった。この中国の悲劇を代償にして、逆に東欧諸国やソ連の社会主義体制が、ほとんど犠牲を伴わずにあっという間に崩壊してしまっただけです。

このような状況を経て、世界が大きく変わりました。つまり冷戦体制が、正確には米ソ対立を軸にした東西冷戦体制が崩壊したのですが、残念ながらアジアにはまだ冷戦が残っているのです。冷戦というのは、そもそもが共産主義と資本主義、あるいは社会主義と自由主義といってもよい、そのいわば非戦闘の戦いですから、心理戦としても情報作戦としても、国際政治の舞台でも、あらゆる駆け引きをするのが冷戦です。その極みが例の1962年のキューバ・ミサイル危機で、ひょっとすると世界が全滅するかもしれないという一歩手前まで行きました。最近、『13デイズ』という映画が話題になって、私も観ましたが、あの緊迫の13日間、若きケネディ大統領とそのブレーンは全力をあげて知恵を尽し、ついにミサイル危機は回避されたのですが、今日ではそういう東西冷戦期の状況か

ら変わって、急速に世界が一つになりつつあります。それとともに冷戦体制のときとは違うさまざまな現象が国際社会に起こってきています。あるいは冷戦体制のときには、潜在していたかもしれないけれども見えなかったものが、たくさん表面に出てきたのです。

その一つが、地域的なアイデンティティ ( i d e n t i t y )、自分たちの生存空間の個性なり特徴、多様性というもので、それをものすごく主張しはじめたことで今、世界にはさまざまな問題が新しく起きています。それに応じて、国際関係論という学問も、わかりやすくいうと、国家と国家の関係を考える学問であるよりは、国際社会の変動のなかから、地域に密着した一種の新しいアイデンティティを考える学問へと深まり、変わりつつあるのです。あるいは、民族ということではくくれない単位に関する研究が、より重要になってきているともいえるのです。そもそもネーションというのは、国民国家の形成があって、一つの民族的な単位でまとまった国家というものが線引きされて、意味をもっていた。ヨーロッパの歴史で考えると17世紀の後半くらいから中世が終わり、いわば近代史が始まっていく。その間に、徐々に一種の市民社会ができてきます。そしてネーション・ステイト ( n a t i o n s t a t e ) といわれるような、いわば一つの国内統一市場ができ、交通手段も確立し、そして例えばドイツとフランスという境界もだんだんできてくるわけで、それがいわば国民国家の形成といわれるのです。国民国家のネットワークがネーション・ステイトを基礎に生まれてくる。ヨーロッパ・ステイト・システム ( E u r o p e a n s t a t e s y s t e m ) といわれるようなヨーロッパ的な国家のネットワークといってもよいでしょう。つまり国際社会が徐々にできてきて、近代が始まります。フランス革命後のように、市民社会が内部からも生まれてくる。ですから、市民というものが出現し、市民社会ができ、そして国民国家がある。国民国家の間の関係を律するものが国際法であり、専制君主に虐げられている隣国の市民を救うべきかどうかを法律の立場から考えたフーゴー・グロティウスは「国際法の父」だといわれています。

ところが、今は逆に東西冷戦体制の崩壊のあとで、例えばボーダーレスということがしきりにいわれるようになり、国境がますます低くなりつつあります。またいうまでもなくコンピューターの発達によるIT革命によって、今のインターネットであるとか、どんどん世界が一つになっていくなかで、一方ではそれぞれの地域や民族がいろいろ自己主張をしはじめています。それがアイデンティティなのです。あるいは、アイデンティティの基礎となるのはネーションとしての民族であるよりも、エスニシティ ( e t h n i c i t y ) といわれるようなものなのです。このように国際社会は変動し、それをとらえるための学問も変わりつつあるのです。

## 2. 言語と国際社会

例えば、私にとって一番身近な中国の世界。その中国は決して1つではないのです。中国は1つではないからこそ、中国は1つということをつつも中国の指導者は主張するわけ

で、放っておけばどんどん分解していきます。例えば今、中国の人たちには「自分たちは中国人だ」という意識がほとんど消えて「自分たちは台湾人だ」という意識を持ち始めています。ここに中国と台湾との大きな問題の根本があるのです。それは例えば言葉というものがその背景にあって、台湾の人たちは、今、一般には教えられた言語としての中国語、つまり北京語を話します。しかし、もともと彼らの大部分はいわば台湾語、言語学的分類でいうと対岸の福建省と同じ流れですから、福建語といった方がよいでしょう。もう少しわかりやすく、より正確にいうと、南（ミンナン）語という言語を話していたのです。

南語について少し説明しますと、福建省の地図を見ていただくとよくわかりますが、地図でいうと上の方にある省都である福州（フーチョウ）があり、下の方に大きな港湾都市の門（アモイ）があります。その福州のすぐ南に江（ミンコウ）という大きな川があります。その川は流れが速く、往来を遮断し文化を遮断したために、言葉が江の北と南では違ってしまいますのです。それで語と南語という区分があるのです。台湾の場合には南地方から台湾人の祖先が来たので南語を話すわけです。

実は東京外大の中国語専攻には、私が学長になってから、文部省の概算要求で「中国は1つではない。香港は広東語ではないか。香港もすごく重要になってきている。台湾は台湾語、福建語の世界です。だから従来北京語だけを教えてきたけれど、もはやそういう時代ではない。3つの中国です」ということを主張して、3年次編入を受け入れるかたちで教員を2名増員してもらった要求がうまく通過しました。『3つの中国』（日本経済新聞社、1999年）という私の著書を持って行って、文部省の若い係官に「今や中国には香港もあるし、台湾もある。いよいよ香港の返還だ。広東語もいる」というかたちでコース設定し、現に正規の学生を対象に広東語や福建語も教えています。教員も正規の人たちが教えているわけです。

私が学生のころは、中国語といっても北京語でした。ところが本当に台湾のことを理解しようと思うと、日常生活の心のひだにまで入って行くには、北京語では不十分です。あるいは広東語についてもそうだと思います。香港が返還されて、かえって香港は経済的にもうまくいかなくなりました。社会主義国家の中国に回収されてしまったものですから、そこに自由が失われてしまったのです。しかし、広東語の世界は、北京語と違った1つの言語空間をしっかりと作っているわけです。

そして、北京語と広東語はものすごく違うわけです。皆さんの中にも中国語を学ばれている方がだいぶ増えているということですが、「私は日本人です」というのは「」（我是日本人）」と言います。広東語では「」です。「」の「イズ」に相当する言葉も、発音からして北京語の「シ」と「ハイ」では全く違うわけですから、これでは当然、コミュニケーションができないわけです。

台湾の李登輝前総統はなかなか賢い人で、ご承知のとおり民主化をあそこまで成し遂げた人ですし、そもそも学者としても大変立派な方です。彼は国民党を解体するというか、国民党はまさに共産党と同じで、共産党と国民党が一致している点は「中華思想」であり、

皇帝型権力構造である、と考へて来たのです。結局、社会主義になつても毛沢東にしても、小平さんにしても赤い皇帝になつてしまいました。同じように国民党の蒋介石や蔣経国も家父長体制で、みんな自分たちの身内なり、自分たちの都合のよい政治をやつていたのです。

そもそも中華世界に民主主義はなじまないのです。それを台湾の場合は、あそこまで民主化して民意に基づく政治を導入したことは大変なことですが、そのときにどういふことをしたかといへば、例へば蒋介石さんが話す中国語は、李登輝さんにはわからないのです。蒋介石さんは出身が江（セッコウ）財閥で、江語です。中国の江省（チョーチアン）の方言です。そうすると李登輝さんでもわからない。李登輝さんは台北高校から京都大学の農林経済学科に進みました。農業ではなく農林です。京都帝国大学には農業経済学科はありませんでしたから、李登輝さんは農林です。東京帝国大学は農業経済ですが。農林経済を学んで、そして新渡戸稲造や西田幾多郎などに傾倒し、日本である意味の教養主義を身につけて日本人として育つた人です。だから日本語はもちろん達者で、日本人以上にりっぱな日本語を話します。ところが北京語はエデュケーテッドなランゲージですから、我々の英語と同じです。

もちろん李登輝前総統も、台湾のトップに立っていたわけですから、現在では当然、北京語を上手に話されます。エスニックには、つまり出身の一番のルーツは客家（ハッカ）です。特殊な客家族というエスニック集団です。しかし李登輝家は4代くらいたっていませんから、もう客家語は話しません。日常的に一番よく話せるのは、先程の南語と日本語です。それをよいことに、蒋介石さんが何か言つても自分はわからないと言つたのです。

わからないことがよいことである場合もあるのです。蒋介石夫人の宋美齡さんは上海の例の宋一族三姉妹の一人で、今は102歳になられていますが、アメリカでご健在です。李登輝さんが総統になった直後に、台湾の軍人、柏村という人が、なかなか軍の実権を譲りませんでした。李登輝さんは柏村さんが握っていた軍の実権をもぎ取ろうとしたけれど、とにかく学者上がりの一台湾人で、一方には古色蒼然たる大中華民國の、いわば大人（たいじん）たちがたくさんとりまいてるわけです。蔣家一族（とそのとりまき）はそれだけの力を持っていましたから、そういう人たちと一緒に、宋美齡女史が李登輝さんに不当な要求を出すわけです。「柏村を絶対軍から動かしてはいけない。参謀総長としてとどめよ」と。そのときに李登輝さんは、私は宋美齡女史の話す上海語がわからないから、「どうか書いてください」と言つたのです。書いたら証拠として残りますから書くわけにはいかない。李登輝さんはそのようなたたかいを経て柏村氏を行政院の国防部長、つまり大臣にすることによって、シビリアン・コントロールに持つていこうとしたのです。そのときも、言葉が武器になりました。そういうすさまじいたたかいをして、国民党の古い体質を中からえぐるように変えたのです。

こういう事柄もまさに東西冷戦体制が崩壊して、いろいろな自己主張なり地域的なアイデンティティというものが出てくる中で起つている、国際社会の一つの現象なのです。

こうした国際社会の変動の内面をとらえるには、従来の国際関係論や地域研究（Area Studies）では不十分であり、「国際社会学」というような新しい学問分野が必要ではないか。特にアイデンティティやエスニシティという問題を掘り下げたかたち、つまり国と国とのつながりがもたらす変動の内面に深く潜んで、中までえぐり出すようなところまでいかないと、これからの国際社会は十分に理解できないのではないかと思われる。

### 3. 国際社会学のすすめ

そういうことから、わたしは国際社会学という分野を今後唱導し、自分でももっと研究を重ねて、できれば国際社会学者として発言してゆきたいと思っているわけです。これは英語でいうと、インターナショナル・ソシオロジー（International Sociology）ではなくて、トランスナショナル・ソシオロジー（Transnational Sociology）とかソシオロジー・オブ・トランスナショナル・リレーションズ（Sociology of Transnational Relations）などという言い方になると思います。21世紀にはそういう学問がより一層必要になる方向に今、国際社会は動いているといえましょう。

このような新しい学問の中核となるのは言語（Languages）です。言語も世界には7000前後の言葉があるといわれています。今、東京外大では26の言語を教えています。例えばラオス語もカンボジア語も教えています。チェコ語も教えています。これらの外国語に学生定員を付けて教えているところは、世界でもほかにありません。東京外国語大学にはアジア・アフリカ言語文化研究所というかなり大きな研究所が、全国共同利用の附置研究所としてあります。そこでも研究言語がありますから、大学院でも例えばツングース語など教えている場合があります。しかし、せいぜい東京外大で教えたり、研究しているのは50くらいの言葉です。ところが世界には7000前後の言葉があるということです。7000の言葉はとてもカバーしきれませんが、少なくとも言語というのはやはり一番大事なコミュニケーションの原点ですから、その多様性というところを視野に入れたような国際関係の学問体系を考えていく必要があるのではないのでしょうか。

エスニシティという言葉も、『オックスフォード大英辞典』を引いてみますと、ようやく1970年版の補遺に登場したくらいの新しい英語なのです。昔はネーションなどしかないけれども、今日ではエスニシティが重要な単位的概念である。なかなか訳しにくい言葉ですが、それを「民族」と訳してもいいかもしれません。ただ、国家権力などにつながった民族でなく、もう少し深く細かい単位概念ですね。ですから、梅棹忠夫先生が中心でおつくりになった大阪の国立民族学博物館は、ナショナル・ミュージアム・オブ・エスノロジーといっています。

それからもう一つの重要な問題は、そういう状況下の人たちが、単にいわば発展途上や

いわゆる未開の部族というかたちで存在するのではなく、もっと文化や経済や社会の変動、発展と結びついていることです。例えば台湾がそうですし、深刻な地域紛争になりましたが東欧諸国にしてもそうです。そういうところで出てきているエスニックなアイデンティティは、従来は独立運動として起こったのですが、今はもっと違ったかたちで横断的に動いています。このアイデンティティは何と訳したらよいのでしょうか？

カタカナ英語はけしからんと言いながら、なかなかよい訳語がないので新聞でもカタカナで書く。意識すれば「自己証明」とか「存在証明」としてもよいと思います。それを台湾では、李登輝さん自身も考えたようですし、私も一緒に議論したのですが、「認同（レントン）」という言葉が当てたのです。こういうときには漢字は非常に便利ですね。北京語の発音で「レン・トン」、同じであることを認め合う。同一的な集団、同族の集団、つまり同じであることを自ら認め合うことがアイデンティティなのです。この言葉は大陸の方では、まだ使われていませんし、字引にも出ていません。ということは、大陸の方では今あまりアイデンティティが強まって、チベットはチベットだとか、先程言った広東省は広東省だとか、新疆（シンジアン）ウィグル自治区はトルコ系ウィグル族だとか、そういうアイデンティティが高まって独立傾向が強まったら困るからなのです。いずれにせよ、「認同」という言葉はまだ大陸にはありませんが台湾にはあって、とてもよい訳語だと思います。日本はその点ではまだ言葉を見つけ出せずに、アイデンティティとカタカナで書くのです。何かいい訳語がないものか皆さんも考えてみて下さい。

このように、いわば国際社会の変動というものを、学問の世界でどのように受けとめていくかということ、私は今、自分の専門領域から問題提起いたしました。いずれにしても、国際関係論もましてや国際社会学といった学問は、いわば学際的（*interdisciplinary*）ないしは多専門的（*multidisciplinary*）な学問ですので、研究者同士の交流や大学間の提携がきわめて有効な分野であります。その目的の一つは、教育・研究による国際貢献だと思いますので、私たちの四大学連合が将来、大きな意味をもつようになりますことを期待して、私の講演を終えたいと思います。